

# 第8次学力向上に関する提言

( H26～28年度 )

## 「おおだて型学力」の向上

### ～大館「ふるさとキャリア教育」を通して、 社会を生き抜く学力を～



平成26年4月

大館市教育委員会  
おおだて型学力推進委員

## I 第8次学力向上に関する提言

### 1 経過及び趣旨

平成23年から3か年、第7次学力向上に関する提言に基づいて、「育てたい確かな学力」、「身に付け高めたい確かな授業力」を目標に、大館市の学校教育に係る諸機関が一丸となって学力向上施策に鋭意努力してきました。

各学校では、4月に全国標準学力検査（NRT）を実施し、結果の分析をすることにより児童生徒の実態を明らかにし、課題解決等に対応した学習指導の改善に努め、学力向上を目指してきました。また、市教育委員会においても、県の学習状況調査や、全国学力・学習状況調査等の実施にともない、全国的・全県的見地から本市の学習指導の課題等を明らかにし、課題解決のための構想を立て実践・評価し、改善に取り組んできました。これらの取組は、大館市の教育や各学校の学校経営にしっかりと定着しています。

また、新学習指導要領が小学校は平成23年度、中学校は24年度から全面実施となったことから、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視した創意ある教育課程を編成しました。特に、諸調査の結果を踏まえて授業改善を行いながら、「ゴールを明確にした授業」「分かる授業・できる授業」を実現してきました。それらの具体的な施策により、現在、全小・中学校とも、子どもたちが主体的に学習へ向かう姿が見られ、諸調査からみても学力は良好な状態で安定しています。第7次の提言の成果であると高く評価しています。

しかしながら、本市では少子高齢化が急速に進み、地域の未来を担う人財育成が喫緊の課題となっており、平成23年度から、本市独自の教育理念として「ふるさとキャリア教育」を掲げています。子どもが自ら進むべき進路を見出したときに、その実現のために身に付けておくべき最大の力が「学力」であることを踏まえ、すべての子どもに学力を保障することが、学校及び教職員の責務と捉えて努力してまいりました。

平成26年度からの3か年計画となる第8次の提言として、「ふるさとキャリア教育」の理念を全教育活動に広げることを基本に、「子どもの生涯を支える学力」＝「生きる力」の育成を目指します。自立の気概と能力を備え、ふるさとの未来を切り拓く総合的人間力を「おおだて型学力」とし、質の高い授業実践を通して、伸びやかな知性、しなやかな感性、豊かな人間性を総合的に育み、諸調査にみられる高い学力をこれからの社会を「生き抜く力」に転化する実践に取り組みます。その具体化に向けては、学校教育に携わる教職員が目的を共有し、校種・教科の違いを越えて、協働研究、共通実践を推進する態勢が求められます。

また、研究実践の方策として、大館市の子どもが将来、社会人として地域や職場で人間らしく活躍するために必要な能力を「社会人基礎力」、その基礎的な能力を活かし、他者と連帯してよりよい社会を築くための能力を「社会人実践力」と捉え、それらの力を小・中学校の9年間で計画的・系統的に育てていきます。特に、地域社会の自立に必要な、高度な専門性を身に付けた人財と、外界に対する発信力と競争力を備えた人財を育成することが最優先の課題と捉えています。

第8次の提言が示す「社会人基礎力」とは、文部科学省が学習指導要領で示す「生きる力」として捉えている人間の能力を、社会人としても必要な能力として見直したものであり、「社会人実践力」は、「知」に関する学力と行動・体験の統一的な学びを通して培われる力を表すものです。これらの力は、学校の教育活動だけではなく、地域社会や家庭でも同様に培うべきものであるため、これまで以上に、学校と地域社会、家庭とが一体となり、大館市の子どもを育てる意識と責任をもたなければなりません。また、「社会人基礎力」「社会人実践力」は、子どもだけではなく、大人も親として、職業人として、市民として生涯成長し続けるためのキーワードでもあります。

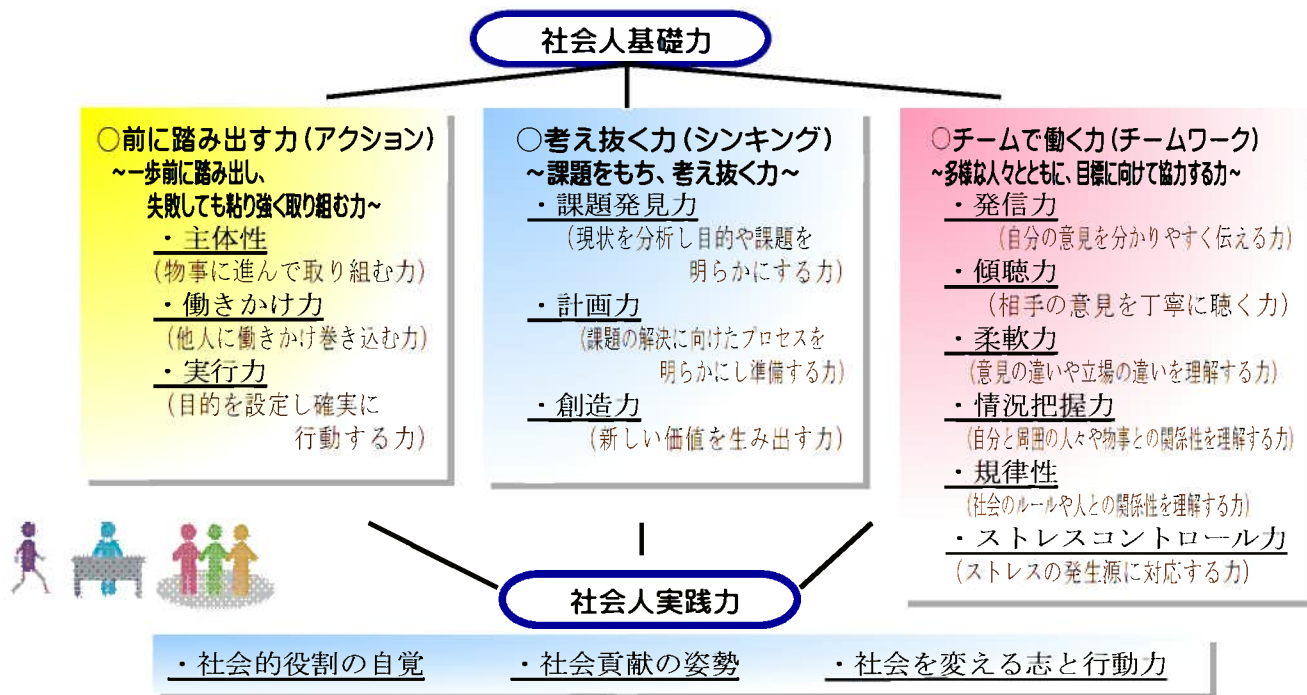
子どもたちが身に付けた学力を自らと地域社会の将来を切り拓く力として自覚し、未来の大館を支えるたくましい市民へと育つことを祈念し、平成26年度から向こう3か年で取り組む、第8次学力向上に関する提言とします。

【参考資料】 経済産業省「社会人基礎力育成の手引き」  
秋田大学教授 井門正美氏「実践キャリアアップ教育」

## 2 目標

社会をたくましく生き抜くための「社会人基礎力」「社会人実践力」を育てる

**おおだて型学力** ～自立の気概と能力を備え、ふるさとの未来を切り拓く総合的人間力  
**社会人基礎力** ～将来、社会人として地域や職場で人間らしく活躍するために必要な能力  
**社会人実践力** ～社会人基礎力を活かし、他者と連帯してよりよい社会を築くための能力



## 3 目標達成のための体制と取組



☆これまで大館の教育が培ってきた「学力・道徳性・社会性」等を、「おおだて型学力」（社会人基礎力・社会人実践力）の観点から新たに捉え直し、特に強化すべき能力を、各専門部組織の重点研究項目として研究実践します。その成果は、教職員研究実践発表会等で共有していきましょう。

## II 第7次学力向上に関する提言～最終評価

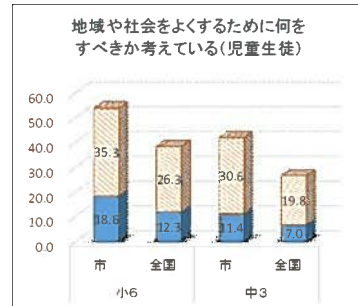
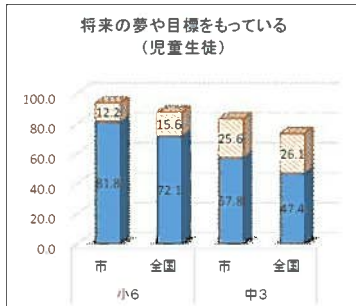
「おおだて型学力」は、次のような背景やこれまでの取組に支えられています！

(各関係機関がまとめた成果と課題、全国学力・学習状況調査質問紙等による実態から)

■ …よく行った、当てはまる □ …どちらかといえば行った、当てはまる

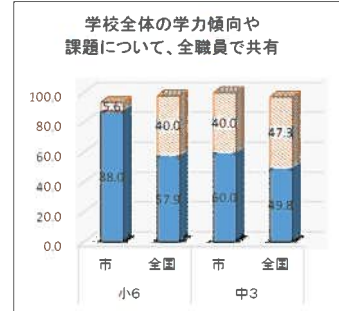
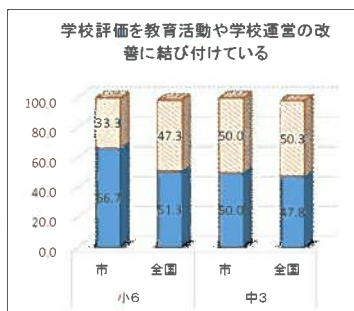
### 1 「ふるさとキャリア教育」を根幹とした特色ある学校経営

ふるさとを愛し誇りに思う気持ち、将来の夢の実現に向けて高い志をもって生きようとする気概、地域に貢献しようとする態度の育成等を目標に、全小・中学校が地域の特色を生かした取組を進めています。学校は地域の元気の源として核の役割を果たしています。成果は子どもの姿や地域の活性化となって現れ、広がり始めています。



### 2 学校経営や教科指導におけるPDCAサイクルの定着

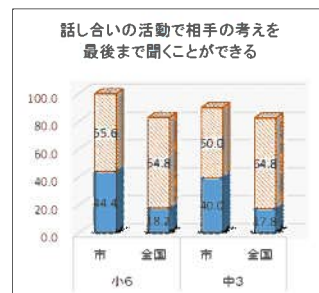
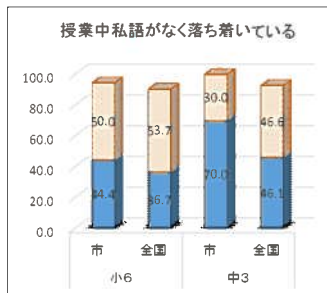
学校評価や人事評価システムの効果的な活用が、授業力の向上につながっています。全国学力・学習状況調査(4月)、県学習状況調査(12月)をPDCAサイクルで、課題の分析、指導の改善や補充指導、評価しています。全職員が、自校の課題を共有していることが強みになっています。



### 3 安定した学校生活、落ち着いた学習環境

小学校における毎朝の読書の実施割合は、全国の3倍以上であり、中学校でもほぼ毎朝静寂のひとときから1日がスタートします。小・中学校が子どもたちを「礼儀正しい」と感じている割合は、全国の2倍になっており、子どもたちが学校内だけではなく、地域における活動の中でも、落ち着いた言動、挨拶ができている様子がうかがえます。

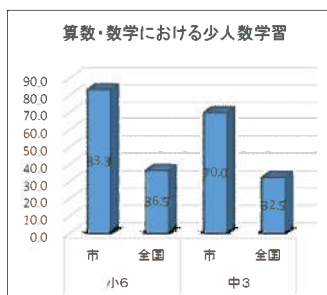
特別支援教育支援員や学校運営支援員の配置による人的環境の充実も落ち着いた学校生活の一要因となっています。



### 4 TT指導や少人数学習によるきめ細やかな指導体制

小学校においては、TT指導や全職員による計画的な補充体制により、基礎的・基本的な内容の確実な習得に効果을上げています。TT指導では、指導者の組み合わせや子どものグループ分けなどにも工夫が見られます。

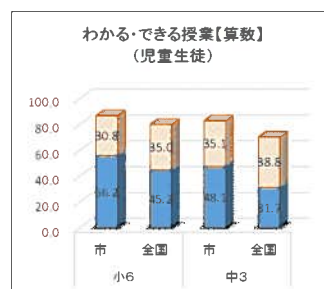
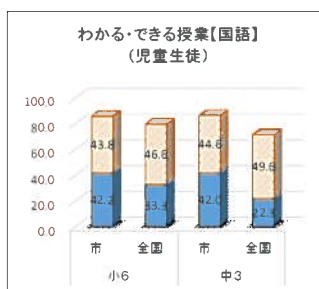
中学校では、少人数学習やTT指導を増やすために、教科を超えた指導者の連携などが見られ、より個に応じた指導が成果を上げています。TT指導による日常的な協働実践は、指導力向上にもつながっています。



## 5 分かる授業・できる授業で、 基礎・基本の確実な習得

小学4年生～6年生では約92%、中学生の約85%が学校の勉強が「よく分かる」「分かる」と答えています。これは、諸検査の分析を生かして指導方法の工夫・改善に取り組み、相互授業参観によって授業力を鍛えてきた成果と言えます。また、朝学習や授業の中に補充時間を位置付け、回復指導を行うなど、落ち込みをそのままにしない教師の熱意と日々の努力に支えられています。

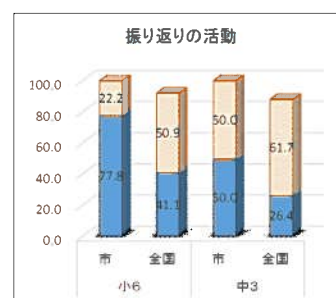
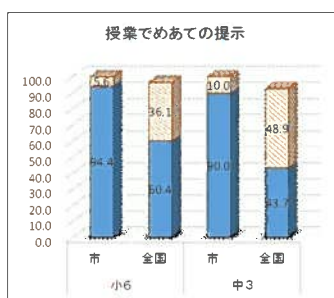
また、「家で学校の授業の復習をしている」小・中学生は、全国の約3倍となっており、計画的な家庭学習も内容の定着につながっています。



## 6 ゴールを明確にした授業、 活用する力を育てるための授業づくり

授業のねらいが明確で、まとめとの整合性のある授業、1時間の学習が構造化され流れが見える板書構成、身に付いた基礎・基本の力を活用する場面の設定、子どもの考えを引き出し交流することで本時のねらいに迫る教師の発問・・・質の高い授業によって、全国トップクラスの学力が育まれています。

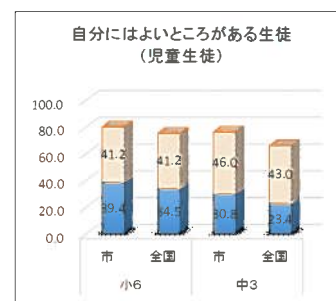
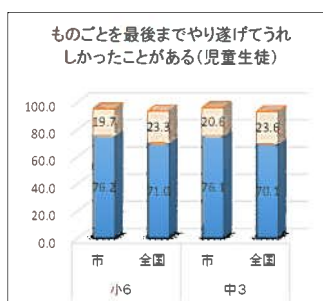
特に、思考力・判断力・表現力を高めるため、言語活動を取り入れた授業を目指して、各校が授業改善に取り組んでいます。



## 7 育まれつつある子どもの自尊感情、 自己肯定感

授業の中で、子どもの「自分で決めたい」「できるようになりたい」「認め合いたい」という3つの気持ちを大切に、生徒指導の機能を生かした学習指導が行われてきました。

小・中学生ともに、「人が困っているときは進んで助ける」「いじめはどんな理由があってもいけないことだ」「人の役に立つ人間になりたい」「失敗を恐れないで挑戦している」割合が全国や県と比較しても高い割合になっています。

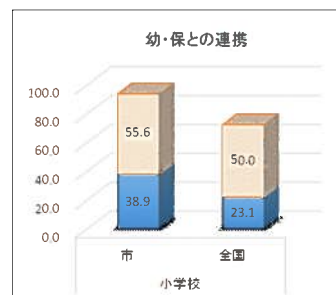
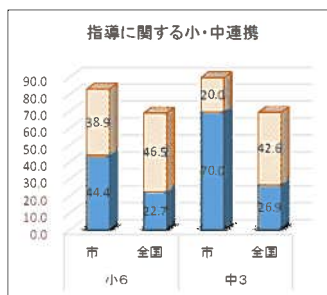


## 8 育ちをつなぎ、支える校種間の連携

中学校区においては共通の課題や実践事項を焦点化し、9年間を見通した学力向上を目指して、授業改善に取り組んできました。

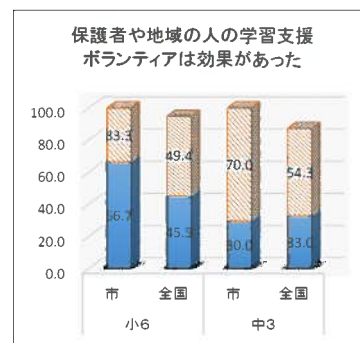
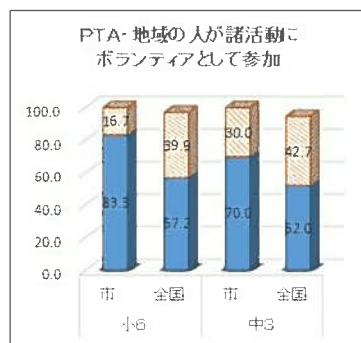
学習規律の維持の徹底、学習方法の指導、家庭学習や宿題への取り組み方の指導についても、小・中学校ともに、県や全国の平均を上回っています。県学習状況調査では、中学1年生の「授業が分かる」と答えた生徒が、全県平均より8.4ポイント高く、小学校から中学校へのギャップが解消されていることが分かります。

幼稚園・保育所等との連携、高校・大学との連携や授業による交流も進んでいます。



## 9 豊かな教育力を生む、 学校と地域・家庭との連携

全小・中学校が、学校支援地域本部を設置して、教育活動全体に協力体制をつくっています。授業や行事への参加、環境整備や安全確保への協力のほか、基本的な生活習慣・学習習慣の確立のための連携強化も進められています。就学前の保護者も含めて、中学校区をあげて、基本的な生活習慣づくりに取り組んでいる地区もあります。「大館盆地全体を教室に、市民一人一人を先生に」、子どもたちが安心して活動できる土壌があり、様々な体験、様々な年代の方々との交流を通して確実に成長しています。



## 10 実践的な研修による授業力の研鑽

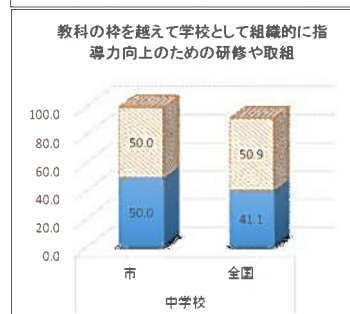
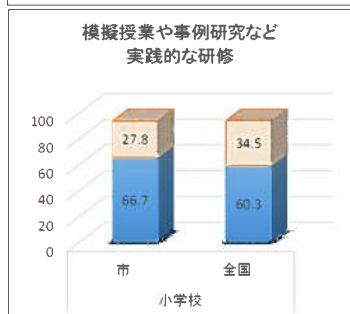
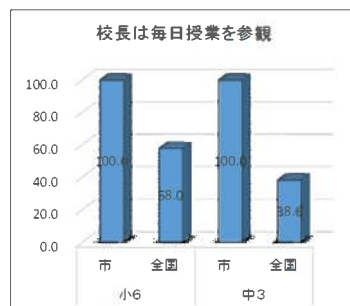
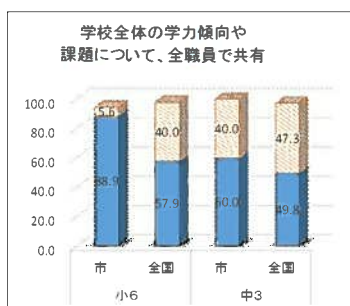
大館市では研究指定による公開授業は休止していますが、市教育研究会の教科・領域別の研究や日常的な授業交流が行われています。自由に互いの授業を見合う環境があります。

また、各校では、学年の壁を越えた基本的な学習習慣の確立、中学校では教科の壁を越えた共通の授業パターンの確立など、学校としての授業のスタイルや流れを共有し、実践する型が出来上がりつつあります。

校内授業研究会では、授業観念カードを活用したり、ワークショップ形式を取り入れたりしながら、活発な意見交換がなされています。

校長先生が毎日、子どもや授業の様子を参観しており、気軽に指導助言を得ることができるのも大館市の特色です。

毎年1月には、教職員研究実践発表会で日常実践の発表、交流が行われ、授業改善や指導方法のヒントを得る場として定着しています。



※グラフは、平成25年度の全国学力・学習状況調査〔児童・生徒質問紙〕〔学校質問紙〕の回答結果より

## 大館「ふるさとキャリア教育」

ふるさとに生きる基盤を培う「ふるさと教育」と、その基盤の上に自らの人生の指針を描く「キャリア教育」を融合した本市独自の教育理念。

「大館盆地全体を教室に、市民一人一人を先生に」をコンセプトに、ふるさとに根ざし、大館の未来を切り拓く人財を育成することを目的とする。

\* 「大館ふるさとキャリア教育」(H25. 3月発行)  
子どもハローワークHP (大館市教育委員会) 参照

